

YOKOHAMA はじめて物語

開港・番地・移民・ホテル・アイスクリーム・新聞・西洋野菜・和英辞典・電灯・公園・レストラン・カフェ。これらのものには共通点があります。何かおわかりでしょうか？実はこれらはすべて横浜から始まったものなんです。鎖国をしていた日本が、1854（安政元年、誰もが知る黒船で浦賀沖に来航したペリーとの間で日米親善条約を締結。さらに1858（安政5）年、米国領事ハリスとの間で日米修好通商条約を締結。これらを皮切りにその後のオランダ、ロシア、イギリス、フランスとの通商条約締結によって門戸を開き、1859（安政6）年開港することになりました。その開港の場として横浜が選ばれ、横浜から鎖国によ

て閉ざされていた日本に、外国人と彼らの持つ文化や技術が流入しました。このようにして、横浜は自然と日本における近代文化の発祥の地となったのです。つまり、横浜初の事柄は、日本初の事柄なのです。

どれだけのものが横浜から始まったか想像できませんか？横浜は日本を代表する港町、国際都市、異国情緒溢れる街なんというイメージを多くの方が持たれています。が、実際に横浜がどれくらいスゴイのか、それは例え浜っ子でも知らないかもしれせん。ここでは横浜と横浜にある有名な街の歴史やその名の由来を紹介し、それから横浜で発祥したものや名所、横浜の歴史的建造物を紹介します。ここではそのうちのほんの一部しか取り上げていません。多数出版されている横浜のものをはじめに

る文献や、横浜歴史博物館や開港記念館に立ち寄って、そして横浜の町を実際に歩いて、横浜のすばらしさ、奥深さ、スゴさを体験してください。

・横浜

今こそ横浜は日本を代表する国際都市となりましたが、かつては横浜村と呼ばれる戸数わずか100戸程度の半農半漁の村でした。その小さな村が開港場・外国人の居留地として選ばれ、日本が鎖国を解く条約を締結する場所として、外交舞台に躍り出ることになりました。もともと開港場としては、宿場であった神奈川が予定されていました。しかし、艦隊が問題なく停泊できる十分な水深をもち、浦賀や久里浜よりも江戸に近いという理由でペリー側が条約

交渉の場として横浜を要求し、江戸からなるべく遠ざけたい、また人口の密集する神奈川よりも小さな村の横浜の方が居留者を取締りやすいなどの理由で、幕府にとっては神奈川よりも都合であったので横浜が条約締結の場、そして開港場となりました。このような背景で、小さな村であった横浜は国際都市の第一歩を踏み出します。開港された横浜村では、もともといた村の住民を今の元町に移住させ、埋め立てや地割りをして外国人を住ませた居留地と日本人の商人を住ませた区間を設けました。

・関内

「関内」という名前の由来は非常に単純です。横浜は、陸の孤島のような、海の中に突き出ている岬に作られた不便な場所に作られた町でありました。しかし、開港場となったからには交通の便がよくなってはならず、現在の横浜駅近くにある浅間下あたりから野下の山に切り通しを造り、東海道から横浜へ向かう横浜道が作られました。その横浜道から横浜に入る所に関所があつて、その関所の内側にあつたことから、「関内」という名がつけられました。関所があつた場所は現在の吉田橋付近で、伊勢左木町商店街の入り口にあたります。開港により関内には外国人からたくさんの輸入品や文化が持ち込まれるようになりました。

・馬車道

横浜の開港は幕府の主導性がかなり強く発揮され、居留地の形成も幕府によって制限されていました。しかし、横浜居留地の外国人の自治行政の動きや、1866年に起こった居留地の5分の1、日本人街の3分の2を焼失する大火事が発生したことをきっかけに、外国人の意見を取り入れる形の居留地再建が行われます。馬車道も外国人の要求によって造成されたもののうちの1つです。

・伊勢佐木町

江戸の豪商であった吉田勘兵衛長信によって、1667年から、9年の歳月をかけて約8188平方メートルの埋立地が完成します。「吉田新田」と名づけられたその土地が現在の伊勢佐木町周辺の土地にあたります。開港後の大火災によって全焼した港崎遊郭が吉田新田に移転し、これが伊勢佐木町市街化の第一歩となりました。町名の由来は、最後の神奈川奉行、依田伊勢守と佐々木信濃守の姓を取ったという説があります。伊勢佐木町はショッピングや食べ物のお店としてにぎわい、馬車道の近代化計画実現に伴って、隣の伊勢佐木町も古ぼけ



ガス灯



鉄道建設のために現横浜駅周辺の土地の埋め立て事業を行い、高島町、高島台の名前の由来ともなった人物、高島嘉右衛門によって、日本初のガス灯がともされました。ガス灯の柱の部分は英国グラスゴー市から輸入し、明かりの部分は日本人職人により製造されたそうです。馬車道から大江橋、本町通にガス灯約300基がとり、それにより暗かった街は明るくなって、商店等への盗難が減ったそうです。しかし、ガス代をうまく徴収できず、高島嘉右衛門のガス灯会社は経営不振になり、市ガス局に引き継がれました。



ガス灯に関わっている高島嘉右衛門。それは、実は彼がガス事業をしていたから。日本で最初のガス事業も彼が始めており、それを記念する記念碑が桜木町駅近くの本町小学校の校門前にある。彼のガス工場は、後に「横浜市瓦斯局」となり、これが今の「東京ガス」になっている。

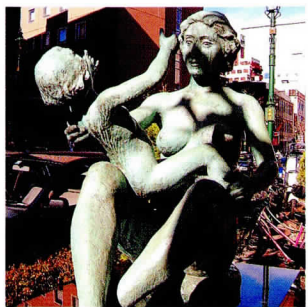
アイスクリーム



明治22年(1869)5月9日、町田房造という人が、馬車道で日本で初めてのアイスクリーム屋「氷水屋」をオープンさせました。それが日本でのアイスクリームの始まりです。彼はアメリカに密航した日本人、出島松蔵にアイスクリームの作り方を教わって、アイスクリーム屋を始めることになったそうです。当時は「あいすくりん」と呼ばれ、シャーベット風の氷菓子でした。

初めてアイスクリームを食べた日本人は横浜開港の翌年、1860年に、日米修好通商条約批准書交換のためアメリカを訪れた使節達でした。アメリカ船の中でアイスクリームを食べ、「川柳日記」に、「珍しきものあり。氷を砕いていろいろ染めて出す。口の中に入れるにたちまち溶けて、まことに美味なり。これを“あいすくりん”という」と書いています。

アイスクリームが工場生産になり、一般の人が食べられるようになったのは大正9年以後だそうです。ちなみに、5月9日はアイスクリームの日。



アイスクリーム発祥を記念して立てられたモニュメント「太陽の母子」像。町田房造がアイスクリーム屋を始めた「氷水屋」があった場所の向かい側に位置する。説明文には、「横浜沿革史に“明治二年六月馬車道通常盤町五丁目二於て町田房造ナルモノ氷水店ヲ開業ス……”と記されています。日本のアイスクリームの誕生です。私達はこれを記念し、このゆかりの地にモニュメントを建て寄贈いたします」とある。なぜ母子像なのかはナゾ。



近代競馬・競馬場(根岸森林公園)

1862年、居留外国人による本格的な競馬会が日本で最初の競馬。その後生麦事件をきっかけに、横浜の居留外国人の要請で、1866年日本初の洋式競馬場、根岸競馬場が作られました。当時の競馬場は上流階級者人のみが楽しむことのできる最高級の社交場でした。その後昭和5年、アメリカ人建築家のJ・H・モーガンにより現在の観覧席が設計されます。ところが昭和14年に地方競馬が廃止。それに伴い、根岸競馬場も閉鎖されます。戦後はアメリカに接収され、駐車場やゴルフ場として使われていました。その後昭和44年、根岸競馬場は日本に返却され、競馬場跡地に森林公園が作られました。明治天皇は競馬の大ファンで、それがきっかけで今の「天皇賞」が創案されたそうです。



横浜の中で多くの人に愛される公園の一つ、森林公園。学校の遠足で訪れるなど、横浜に住む人々には身近なこの公園は、面積181,339㎡のなだらかな地形の芝生が広がる公園。春には梅や桜が咲き乱れ、夏には木々が青々と生い茂り、大都市横浜のオアシスのような場所でもある。敷地内には競馬記念公園と、米軍基地をはさんで、J・H・モーガンが設計した一等馬見所(観覧席)がある。

04 近代街路樹



街路樹とは、近代に入り都市の景観的魅力を向上させるために発達した。馬車を用いる外国人の要請によって馬車道が作られたときに、柳と松の木が植えられたのが日本で最初に植えられた街路樹。馬車道に街路樹が植えられると、商店が競って木を植え、ガス灯が灯り、アイスクリームが売られだすと、夜の涼を楽しむ人々で賑わった。

05 ヘボン



英辞典をつくり、その後日本語をアルファベットで表記するためのヘボン式ローマ字を考案した。また、ヘボンは目録の製法を伝授し、日本で初めての義足に携わるなど、開港以降の日本の西洋文明伝承に大きく貢献した。

06 機械製氷



1879年(明治12年)に米国人アルバート・ウォートルスが横浜山手に日本初の製氷工場、ジャパン・アイス・カンパニーを設立。馬車道でアイスクリーム屋を開くことができたのもこの製氷工場ができたからだろうといわれている。

横浜発祥年表

- ・1854年 塗装・日米和親条約
- ・1859年 税関・クリーニング 洋裁
- ・1860年 バトロール・様式ホテル
- ・1861年 牛乳販売・カトリック教会
- ・1862年 ヘボン博士・喫茶店 牛鍋・写真家
- ・1863年 プロテスタント教会 西洋野菜栽培
- ・1864年 消防と救急・ボーリング 新聞・清涼飲料水製造
- ・1866年 近代競馬・西洋目薬 ポートハウス
- ・1867年 近代街路樹
- ・1868年 移民・義足
- ・1869年 鉄(かね)の橋[トラス式] 下水道・電信 アイスクリーム 乗合馬車・洋書輸入 西洋理髪・吹奏楽
- ・1870年 国歌・君が代・ガス事業 日刊新聞・ビール醸造 西洋式劇場・女学校 洋式公園(外国人用)
- ・1871年 野球・公衆トイレ
- ・1872年 鉄道・ガス灯 プロテスタント教会
- ・1873年 石鹼工場・西洋瓦製造
- ・1875年 外国郵便
- ・1876年 洋式公園(日本人利用可)
- ・1878年 テニス
- ・1879年 機械製氷
- ・1881年 西洋歯科学・海水浴
- ・1886年 クリスマスツリー
- ・1887年 近代水道
- ・1889年 憲法
- ・1890年 電話交換

ていた町の近代化に動き出しました。ここも馬車道と同様に、アーケードを取り払い、歩道と車道の境をなくした遊歩道型にして、電柱が地下に埋められ、現在の伊勢佐木町モールの姿になりました。

・元町
横浜が開港場として決定されると、横浜村がある場所に外国人居留地を作ることが決まり、横浜村の村民は他の場所へ移住しなければならなくなりました。その移住先は山手の丘の下にある元村というところで、そこが現在の元町にあたります。その後元町は関内や山手に住む外国人達の生活物品の買い物の場、外国船へ納入する物品を作る場として、横浜初の商店街となります。元町では馬車や馬車用品、洋風家具なども日本人職人によって作られていました。今ではその当時作られた家具は「元町家具」「横浜家具」と呼ばれ、大変貴重なものになっています。

・山手
関内にあった居留地(外国人が住んでいた地域)の隣にあったのが山手の丘です。この丘は外国人が目をつけ開発が行われ、初めは領事館などの各国の外国公館が建てられました。見晴らしが良いこの丘は外国人に好まれ、その後住宅が建てられるようになり、次第に外国人の高級住宅地となっていきました。また、山手は外国軍隊の駐屯地としても使われており、多いときには200人も外国部隊が駐在していました。後に山手は正式に外国人に解放されるようになり、遊歩道や競馬場、学校などが作られ、日本とは違う、外国にいるような町並みになっていきました。

・日本大通り
横浜開港直後の大火災の後、居留地に住む外国人が近代的な都市計画を要求し、作られた日本初の近代舗装道路が日本大通りです。火災の後、外国人が近代的な都市計画を要求し、13メートルの車道と、両

わきには9メートルの歩道、真っ直ぐに約36メートル伸びる道が作られました。この道路は当時としてはかなり大きく、そのため日本大通りと名づけられました。この幅広い道路は日本人居住区と外国人居留地の間に作られ、火災が起きた際に火が回るのを防止する役割を果たしていました。現在では県庁や三井物産横浜ビル、横浜開港資料館(旧英国領事館)などの古いビルが両側に立ち並び、イチョウ並木が印象的な風情ある通りになっています。ちなみにこのイチョウ並木は関東大震災後に植えられたものです。

・横浜駅
横浜駅開港時には、現在の横浜駅周辺は海の真ん中でした。明治五年に初めて新橋〜横浜で鉄道が建設され、初代横浜駅は現在の桜木町駅の場所に作られていました。しかし、鉄道を伸ばすことを考えるとその場所に駅があることは大変不便だったために、他の場所に移転することになります。

1915(大正4)年、高島町にレンガ造りの駅舎を造り、それを横浜駅とし、従来の横浜駅は桜木町駅と改名されます。しかし、この横浜駅も立地条件から再び移転することとなり、1928(昭和3)年に、現在の横浜駅の場所に移されます。ちなみに現在の横浜駅周辺の土地は、鉄道が通る用地として海を埋め立てた土地です。このような理由があつて、町から離れた、ただの交通施設として作られた横浜駅の開発は遅れていました。かつて裏口とされていた西口周辺は砂利置き場として使われており、表口の東口も郵便局があるくらいでお店などはありませんでした。これらの本格的な開発が始まったのは昭和30年代になってからです。

01

神奈川県庁 本庁舎「キング」

この建物は、震災で焼失した県庁舎を建て直すにあたって公募した、公募作品の中から選ばれたデザインによって建てられました。多くの作品が集まり、デザイン採用者には当時の知事の年収分に相当する5,000円の賞金が与えられました。鉄筋コンクリート5階建てで、塔の部分を入れると9階になります。外装はレンガタイル張り、材料にもこだわり、作りにも色々工夫が施されています。総工費275万円をかけて建設されたこの建物は、昭和9年に横浜税関が建てられるまでは横浜一の高層建築物でした。ここは別称「キング」とも呼ばれています。



建築年代:1928年 構造概要:鉄骨鉄筋コンクリート・地上5階・地下1階
金・土曜日の日没から21:00までライトアップされる。

02

三井物産ビル

県立博物館の工事監督を務めた遠藤於菟氏の代表作である「三井物産ビル」。このビルが日本で最初の本格的鉄筋コンクリート造のビルです。当時三井と対抗していた三菱では倉庫建築に鉄筋コンクリート造を用いていましたが、三井は事務所の鉄筋コンクリート造を実現させました。建築当初は煉瓦造を予定していたそうで、もし煉瓦造だったなら、関東大震災で倒壊し、現在は存在していなかったかもしれません。この三井物産ビルは日本大通りに沿いに建てられています。



建築年代:1911年 構造概要:鉄骨鉄筋コンクリート・地上4,地下1階

03

旧横浜正金銀行 本店本館(県立歴史博物館)

この建物は、もともとは横浜正金銀行本店として明治37年に5年もの歳月をかけて建設されました。関東大震災で建物本体は無事でしたが、ドーム部分を消失。その後横浜正金銀行は活動拠点を東京へと移転し、「東京銀行」となり、横浜正金銀行本店は「東京銀行横浜支店」となりました。後に神奈川県が東京銀行からこの建物を買収し、ドームを復元。さらに県立博物館にするために改修工事を行い現在の姿になりました。



建築年代:1904年 構造概要:鉄骨・煉瓦・石造 地上3,地下1階



04

旧横浜銀行 本店別館

横浜市認定歴史的建造物であるこの建物は、みなとみらい地区に横浜銀行の本店が移転すると今あるバルコニー部を残して取り壊されました。またこの部分もみなとみらい線整備計画等のために、もとの位置から数メートル移動させました。この建物は、洋式建築完成期の作品の一つで、典型的な震災復興の銀行建築であることが特徴です。現在は横浜アイランドタワーの一部として保存されており、また横浜市が推進する歴史的建造物を活用した文化芸術創造の実験プログラムである「BankART1929」の場として活用されています。

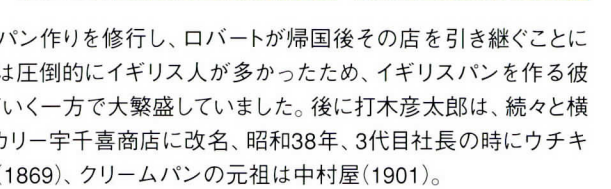
建築年代:1929年 構造概要:鉄骨鉄筋コンクリート・地上3階

07

パン製造

日本人で初めてパンを焼いた人は内海兵吉という人だそうです。彼の父が江戸で菓子屋をしていたために、似た商売をしようとパン屋を始めました。彼の談話の記録によると、「焼餅釜のようなものでいい加減に焼いた」ために、「何だかわからないもの」が出てきたが、「外国人の食べるものがないので」それでも良く売れたそうです。その当時、パン屋の周辺には多くのフランス人が駐留していたため、フランスパンが主流だったそうです。

元町にはウチキパンという大変古いパン屋さんが今もなお営業しています。その前身は1862年横浜にやってきたイギリス人ロバート・クラークが横浜に住む外国人のためにヨコハマベーカリーでした。彼の元で打木彦太郎がパン作りを修行し、ロバートが帰国後その店を引き継ぐこととなります。これが現在のウチキパンとなります。当時横浜に住んでいた外国人は圧倒的にイギリス人が多かったため、イギリスパンを作る彼のパン屋は外国人(アメリカ人とイタリア人)が経営する他のパン屋がつぶれていく一方で大繁盛していました。後に打木彦太郎は、続々と横浜でパン屋ができるにつれ、名前を混同されないように店名をヨコハマベーカリー宇千喜商店に改名、昭和38年、3代目社長の時にウチキパンとなりました。食パンの元祖はここウチキパン、あんぱんの元祖は木村屋(1869)、クリームパンの元祖は中村屋(1901)。



1885年に「電話機」と呼ばれるまでは、「伝話機」と呼ばれていた電話。工部省と宮内省との間に架設されたのが最初で、横浜では神奈川県警察本署と堺町警察署、戸部監獄署との間のもが最初。月給が4円くらいの時代に、使用料金は、横浜で35円、東京で50円とかなり高額だった。

08

電話

1876年、アメリカのグラハム・ベルが電話を発明し、早くも翌年、横浜にあるベル電話会社の日本代理店により輸入されました。電話が横浜で最初に実用されたのは、電話機が輸入された翌年の1877年。当時は、主に警察通信用に使われていました。1890年(明治23年)東京～横浜間で電話サービスが始まりましたが、当初は加入者が横浜42名、東京155名と非常に少なく、そのため加入者以外の人にも電話の使用を促すため、東京と横浜に公衆電話所が設置されました。これが現在の公衆電話の起源となります。

電話が開通された当初は身分の高い人しか利用しなかったため、「おいおい」と声をかけ、「はい、ようござんす」と返答されていました。「もしもし」が使われるようになったのは、電話交換手が中継ぎをしていたので、繋ぐ相手に失礼にならないよう「申し上げます」と言っていたからだそうです。

10

鉄道

ペリー来航時にお土産として持ち込まれた、本物の1/4サイズのSLにまたがった幕府役人が国内で始めて蒸気機関車に乗った人物。外国から鉄道建設を提案され、政府自体も鉄道の必要性を感じていたものの、その建設にかかる莫大な費用の蓄えなどなく、外国から借金をして工事を開始。鉄道建設反対者による妨害などもありましたが、優秀な外国人鉄道建設技術者達により無事完成しました。明治4年の横浜～品川の試運転を経て、翌年正式に横浜～新橋で運行が開始されました。片道35分、1日に9往復し、運賃は3つのランクに分かれていました。片道上等1円50銭、中等1円、下等50銭。下等の50銭でも当時のソバ100杯分の値段で、庶民には手の届かない乗り物でした。



西洋理髪

横浜開港後、マゲを結う「結髪」として活躍していた小倉虎吉。当時、各国の人々が集っていた横浜では、彼の技術は日本人だけでなく、中国人の頭の中央の髪の毛だけを長く残し編みこんでいく「辮髪」という髪型や、西洋人の髻剃りにも活かされました。仕事のために外国船をたびたび訪れていた虎吉は、船内にいる西洋人理髪師の散髪テクニックを見て覚え、その後明治2年に、外国人居留地内、今の横浜中華街あたりに日本人として初めての西洋理髪店をオープンしました。明治4年に「断髪令」が出されましたが、多くの日本人がマゲを切り「散切頭」にすることに抵抗があったらしく、実際に広まったのはそれから何年か経った後でした。散切頭とはまさにこの記念碑のような髪型だったようです。

09

